自然賛歌
―可愛川の鴨―

妹尾　治人

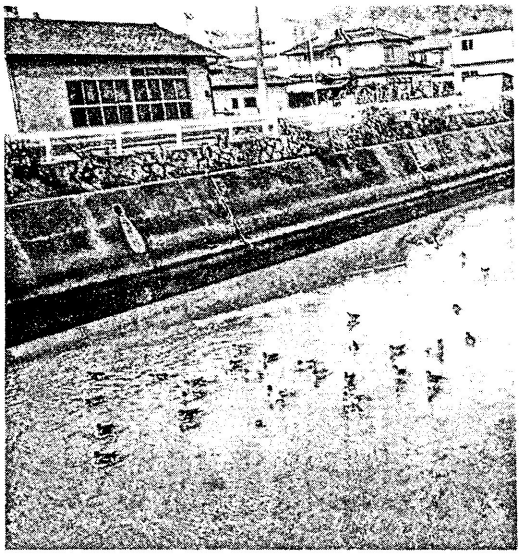
廿日市市の海岸を歩いて見ると、カモ、サギ、カモメ、シギ、チドリ、セキレイ等、沢山の水鳥に出会う。その中で、冬の渡り鳥カモの観察ができる場所とその概数は次のとおりで、干潟の広い御手洗川河口が一番多かった。

御手洗川河口	九〇〇羽
可愛川河口	二〇〇羽
地御前港付近	一五〇羽
阿品鰆が浜	一〇〇羽
佐方川河口	八〇羽

カモは、人間が近づくと逃げ出すが、可愛川のカモはなぜ逃げないのか、その理由は餌を貰っている為である。餌付されたカモは観察しやすいので、可愛川でカモの一日を追ってみた。

先ず、下榎之浦橋で鳥達の出勤状況を調べてみると、一番早いのがカモで、六時四十分まだ暗いうちにどこからともなく川に帰ってくる。コサギ、セキレイが六時五十分、ハト、スズメ、カラス、トビは七時に現れた。カモメと青サギは他の場所に出勤したらしく、この朝は姿を見せなかった。

カモは出勤するとすぐ食事にかかる。水草だけでなく、川底の砂を引っ掻き回して、何を食べているのか分からないが、水に頭を突込み一生懸命食べている。

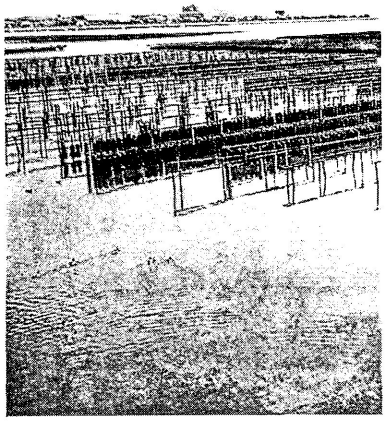


朝の犬の散歩が終わり、九時ごろになると餌のパン屑を持った人が現れる。すると、カモは一斉に撒き餌の場所に集まり、餌の奪い合いが始まる。これを見てハト、カモメ、スズメが飛んできて餌を横取りする。撒き餌が終わると、また自然の餌を探しに分散する。餌を持ってくる人は、近所の人だけでなく自転車で来る人もある。平均して時間に一回くらい撒き餌の風景が見られる。

カモは雌雄ペアで行動している。雄は冬になると美しい繁殖羽に着替えする。可愛川のカモはほとんどヒドリガモ（頭が茶色）で、ほんの少しマガモ（頭が青色）がいる。カモはときには砂場に上がって休んでいるが、ほとんど一日を食事の時間に費やし、夕方六時過ぎに十数羽宛群れを作って南の方向に飛び去る。ねぐらは、木材港の筏か、近くの樹木の上だと思われるが確認はできなかった。

餌を与えることが好ましいことかどうか分からないが、可愛川のカモは昨年より増加してきた。ところが、二月中旬から三月末まで中榎之浦橋付近で河川改良工事が行われ、カモは仕方なく下榎之浦橋と桜土手の北側の水路に移動し、数も減少した。昨年十月十七日に可愛川に到着したカモは、思わぬハプニングで今年は早目に旅立つのではなかろうか。

昭和六十三年発行の廿日市町史によると、三〇〇〇羽のカモの群生が見られるとあるが、現在は埋立等によりその数は半減している。廿日市市のカキ筏と水鳥は冬の風物詩であり、水鳥の棲める豊かな自然環境をいつまでも守ってやりたいものである。



〃水鳥が群れて絵になるカキ筏〃

（自然観察指導員）